

第4章 これからの三浦市



小松ヶ池近くの河津桜



海南神社 例大祭



わんぱく相撲



道寸まつり



中学校の文化祭に参加した幼稚園児



成人の日のつどい

1 変わりゆく三浦市

(1) 交通機関の発展

半島の先端にある三浦市にとって、交通の便をどのようによくするかが、生活や産業のうえでもたいへん重要なことでした。

明治になってからの新しい交通機関は、1881(明治 14)年、「おしょくり船」に変わって登場した蒸気船でした。地域の有志が設立した会社によって運営され、大正時代まで、横須賀経由で東京と三浦を結び、三浦の魚などを東京まで5～6時間で運ぶ重要な交通機関となりました。

陸上交通としては、1889(明治 22)年、国鉄(現 JR 東日本)横須賀線が横須賀まで開通しました。三浦では1901(明治 34)年、三崎－浦賀に乗り合い馬車が通うようになり、1909(明治 42)年には、三崎－長井が開通して、乗り継いで横須賀まで行き来できるようになりました。北原白秋などの文人が三浦を訪れるのは、このころからです。

さらに1917(大正 6)年には、三浦－横須賀に乗り合い自動車が運転されるようになり、トラックによる魚やダイコンの輸送も1919(大正 8)年から始められ、しだいに交通の中心は陸上に移るようになってきました〔東京湾汽船は1933(昭和 8)年に廃止〕。そして軍事体制強化のなか、1942(昭和 17)年に湘南電気鉄道(のちの京浜急行)が、1944年には国鉄横須賀線が、久里浜まで延長されました。

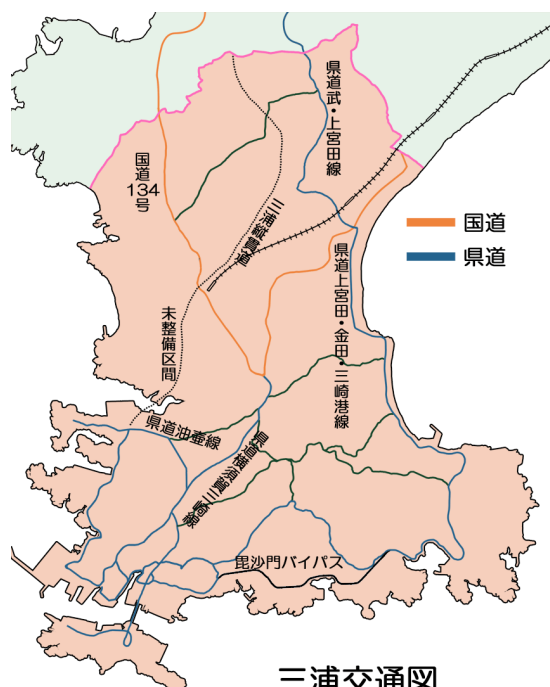
戦後は各地で、道路の拡張・舗装とともにバス路線も広げられ、1960(昭和 35)年には、城ヶ島大橋(2 - 46 ページを参照)も完成しました。城ヶ島、油壺、三浦海岸(当時は下浦海岸)などには多くの観光客が訪れるようになり、1966(昭和 41)年には、市民待望の電車が三浦海岸まで延長され、1975(昭和 50)年には、三崎口まで延長されてきました。



三浦海岸駅開通記念の花電車
(京浜急行電鉄(株)提供)

このように、発展してきた陸上交通は、観光客の増加、上宮田・初声地区を中心とした人口増加やベッタタウン化、魚や野菜の輸送力増強などをもたらしましたが、一方夏の期間や休日を中心とした交通渋滞や、交通事故の問題、さらには新しい道路・鉄道の建設により、自然や景観の保存といった課題もおきています。

今後、三浦縦貫道路、西海岸線道路の延長などが待たれますが、安全施設の充実や、自然との調和を十分考えた開発が必要とされます。



三浦交通図

宅地化された三崎口周辺
(編集委員作成)



(編集委員撮影)



(編集委員作成)



車で混雑する引橋交差点

(編集委員撮影)

三浦市 交通事故発生件数(2018年～2023年)					
2018	2019	2020	2021	2022	2023
114件	87件	106件	122件	119件	135件
※三崎警察署HPより					

(2) 人口の移り変わり

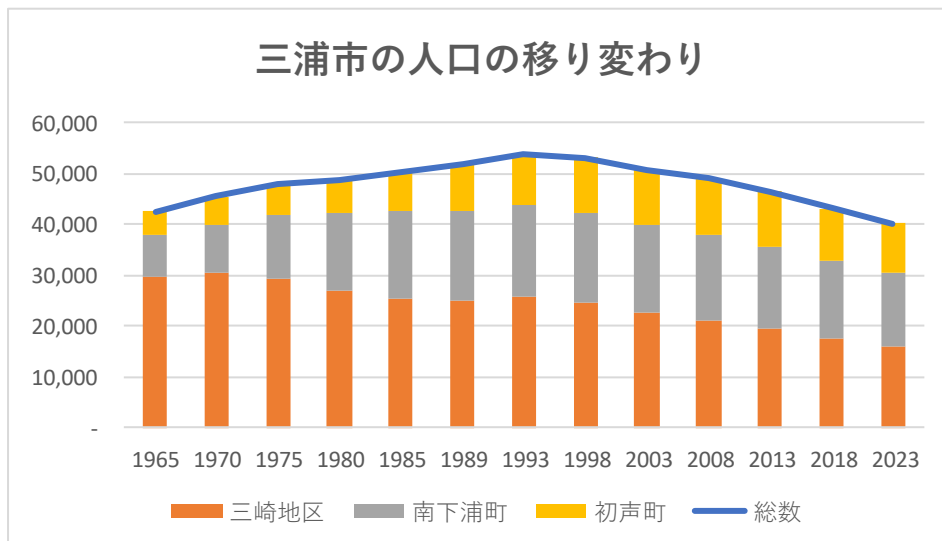
人口の移り変わりと人口密度

現在、三浦市にはおよそ 3 万 9 千人（2025(令和 7) 年度現在）が住んでいます。1920(大正 9) 年の第 1 回国勢調査から現在までの人口の変化は、下のグラフの通りです。1995(平成 7) 年まではずっと人口が増加してきましたが、近年不景気、少子化の影響を受けて、人口は減少しています。

三浦、南下浦、初声の地区別に見ると、1970 年まで三崎地区では大きな人口増加があり、1975 年からは三崎地区が減少し、南下浦、初声地区の増加が目につきます。これは三崎地区が 200 海里問題、オイルショックなどでマグロ漁業の不振による人口減少となる一方、京浜急行が三浦海岸駅(1966 年)、三崎口(1975 年)まで延長になり、駅周辺で宅地造成(都市化)が進んだことによる影響です。

人口増加にともなって、人口密度も高くなっています。特に三浦海岸駅開設後、多くの集合住宅が建設されたため、上宮田地区の人口密度は急激に高くなり、1965 年の 859 人/k² から、2005 年には 3,435 人/k² になりました。

一方三崎地区は、人口減少にともない人口密度も下がってきていますが今でも、市役所、病院、消防署、警察署などがあり、市の行政の中心です。



(編集委員作成)

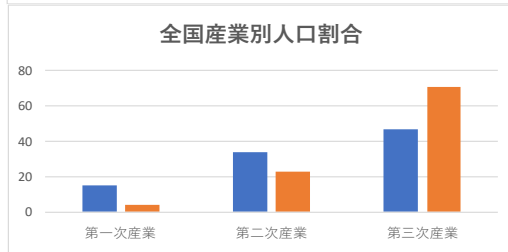
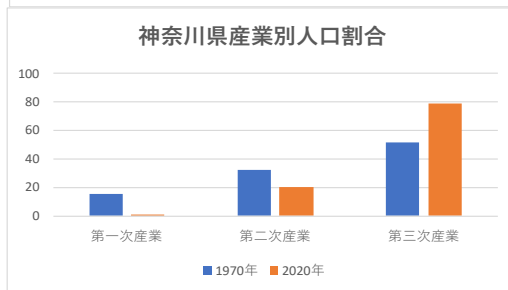
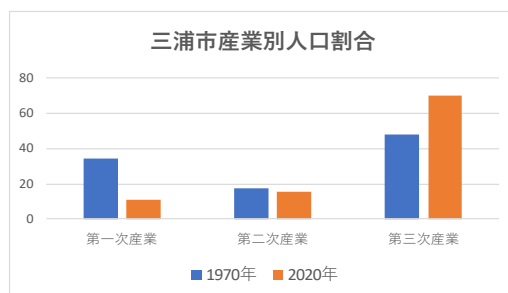
下のグラフや表で示す通り、三浦市の産業別人口は、全国の傾向と同じく、農業・漁業の第1次産業が大きく減少し、建設・製造などの第2次産業、小売り・卸売り・サービス業などの第3次産業が増加しています。

これは、国全体が高度経済成長期をへて、第2次産業、第3次産業中心の社会に変化したことのあらわれですが、この内容を国全体と神奈川県産業別就業者数と比べた場合、三浦市では、第1次産業の減り方が少なく、農業・漁業のさかんな市であることもよくわかります。

とくに南下浦地区、初声地区は、農家を中心とした第1次産業で働く人があまり減っていない全国でもめずらしい地域です。

三崎地区の第1次産業で働く人の大幅減少は、マグロ漁業などの不振によるものです。

また、第3次産業で働く人の増加は、人口が急増している南下浦・初声地区でとくにはっきり現れています。



三浦市各地区別の産業別人口の推移

地区別	年	就業者数	第1次産業 就業者数		第2次産業 就業者数		第3次産業 就業者数	
			人	%	人	%	人	%
三崎	1995	13,309	989	8	3,241	24	8,038	68
	2000	11,790	777	7	2,633	22	8,331	71
	2005	10,720	877	8	2,180	20	7,662	71
	2010	9,459	548	6	1,701	18	6,950	73
南下浦	1995	9,869	1,589	16	2,107	22	5,917	61
	2000	9,122	1,465	16	1,739	19	5,921	64
	2005	8,018	1,401	18	1,554	17	5,063	65
	2010	8,119	1,248	15	1,219	15	5,433	68
初声	1995	5,405	1,011	19	1,288	24	3,098	57
	2000	5,490	963	18	1,143	21	3,381	61
	2005	5,448	876	16	1,033	19	3,405	63
	2010	5,227	810	15	843	16	3,448	68

(三浦市統計書より)

通勤・通学で三浦から出る人、入る人(三浦市の昼間人口)

地 域	流出人口		流入人口	
	1965年	2010年	1965年	2010年
横 浜	390人	3392人	93人人	492人
横 須 賀	2244人	6243人	1235人	3273人
川 崎	33人人	371人	15人	26人
鎌 倉	75人	190人	35人	32人
逗 子・葉 山	167人	269人	62人	156人
その他の県内	43人	245人	68人	91人
県 外	539人	1610人	551人	164人
合 計	3101人	8928人	1966人	4234人

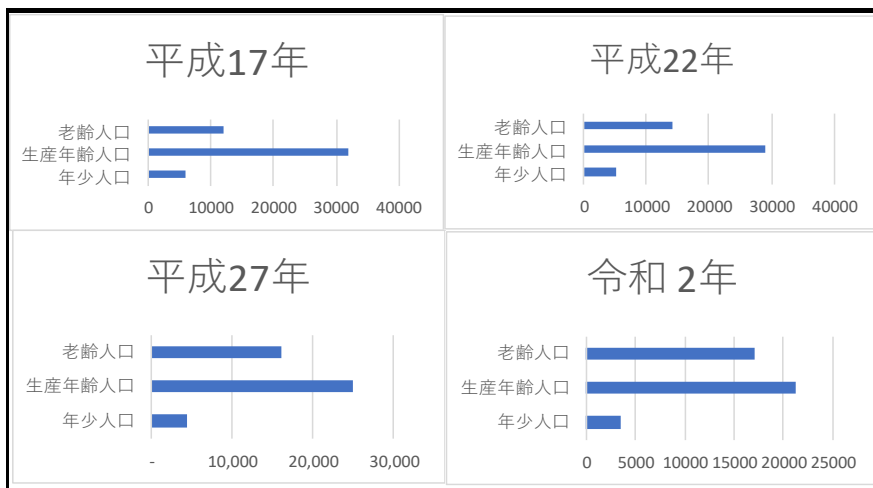
(編集委員作成)

一方、昼間の流出、流入人口を見ると、近年、横須賀、横浜など京浜急行沿線を中心とした大都市へ、働きにいたり、通学する人が多くなっています。三浦市には、大きな工場や商店が少なく、前の産業別人口の変化とあわせて見ると、昼間は大都市で働き、夜

は三浦に帰って休むベッドタウンとなっていることもよくわかります。

進む人口の高齢化

下の平成17年、平成22年、平成27年、令和2年の三浦市の年齢別人口構成をみると、三浦市でも、人口の高齢化が進んでいることがよくわかります。これは、平均寿命が年々のびていることとあわせて、子どもの生まれる数が減っているという「少子高齢化社会」のあらわれであり、日本全体の様子と同じ傾向にあります。また、三浦市には、気候や景観がよいことなどから、大規模な有料老人ホームも建設されました。お年寄りの住みやすい、あるいは、若い人とお年寄りが、ともに気持ちよく住める町づくりをしています。



三浦市の年齢別人口構成

(編集委員作成)

（３）大都市と結びつく三浦市

三浦市でも交通機関の発達にともない、各地で、宅地の開発が行われ、人口の急増が進みました。

なかでも最も変わり方の激しいのは、南下浦の上宮田地区です。三浦海岸駅ができてから駅の周辺に、県営住宅をはじめ、集合住宅地が次々に建設されました。

初声、三崎地区でも、三崎口駅の開設をきっかけとして、駅周辺や国道沿いに大規模な宅地開発が進められました。また、初声の入江地区には埋立地に県営住宅（シーサイドタウン）が作られました。

このように三浦市では、駅周辺を中心とした大量の住宅建設により、たくさんの人が短期間に三浦市へ引っ越してきました。三浦に住む人たちも横須賀、横浜、さらには東京までも通いやすくなりました。

これらのことは、新しい住民が急速に多くなり、大都市との結びつきがいっそう強まったことであり、サラリーマン家庭の増加とあわせて、第１次産業を中心に住民同士の結びつきの強い三浦の地域性を大きく変化させています。また、消費生活のうえでも、大都市で買い物をする人が増え、三浦の商業が発展していくうえで大きな問題となっています。

一方、交通機関の発達により観光客も増加し、平日の人口に比べて、夏休みや休日には何倍もの人口や交通量を三浦市がかかえることになり、ゴミの問題、交通渋滞、事故の増加といった問題をおこ



三浦海岸駅周辺の大規模集合住宅
(編集委員撮影)



谷戸地に集まる農家
(編集委員撮影)



リゾート施設
(編集委員撮影)

しています。今後とも首都圏内の立地条件などから観光客の増加が見込まれ、市民生活への支障を解決する方策が必要とされます。また、リゾートマンションや研修・保養施設の増加による「非定住的な人口増加」と市民生活との調和や、定住市民のための文化・体育施設の充実なども課題となっています。

(4) 市民生活の向上

市民生活を向上させるために、上下水道の整備、ゴミ処理などについては、大きな課題の一つです。とくに三浦市では、半島の先端に位置し、水が得にくいという地理的条件や第1次産業中心の町であるということから、市独自のプランが必要とされ、重要な課題でもありました。

上水道は、1934(昭和9)年着工の初声村の地下水を利用した「三崎町営水道」が、三浦市における最初の水道でした。当初、初声村の人たちは、この水道によって農業用水が濁れてしまうことを恐れ反対しましたが、用水使用に支障がでたら、ただちに水源地の使用をやめるという条件で試掘を始めたものでした。この水道は、1935(昭和10)年完成しましたが、給水規模8000人の計画に対して給水を受けたのは250戸でした。

水道の引ける前は、共同井戸を中心とした井戸水が使用されましたが、塩水の上に水量が少なく、水切れになることもたびたびありました。(そ

のころ、海南神社のわき水がバケツ1杯、2銭5厘で売れたという記録があります。)

戦後、人口増加と災害時の緊急利用に備えるために何回かの水道拡張工事が行われましたが、1950年ころの水道普及率は約50%で、毎日数時間におよぶ断水もめずらしく



昔の井戸

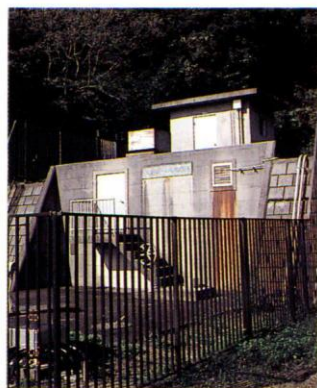


水道開設当時の申し込みのチラシ

(浜田勘太氏所有)

ありませんでした。

そこで、1951(昭和 26)年には横須賀市の分水を受ける工事を始めるとともに、各地域の簡易水道工事を進めました。そして、1965(昭和 40)年には、簡易水道を上水道に統合することが認可され、上水道普及率は 95%となりました。その後も、横須賀からの分水を受けるとともに、施設の整備につとめ、県下全体の水道計画のなかで、1983(昭和 58)年には、給水人口は 5 万人をこえるまでにいたしました。



小網代にある隧道配水池—この下に地下式の配水池がある

(編集委員撮影)

また、海をきれいにする観点からも、そのまま流されていることの多い生活排水をふくめて衛生処理を行なう公共下水道施設の要望もあり、1992(平成 4)年の東部処理区(南下浦地区)の工事をスタートさせ、下水道施設を 20 年間で、市全体に敷設する工事を実施しました。

(三浦市第 3 次総合計画)

全国でもめずらしい中学生の条例づくりへの参加

2003 年 7 月 1 日より、三浦市では、安全で健康的な生活環境の保全を目的とした“「まちをきれいに」みんなで守る条例”が施行されました。この条例づくりには、市内の中学 3 年生 2 名が参加し、全国でもめずらしい例として注目されました。また、全国でも初めて、公共の場所での「夜間花火」を禁止したことでも有名です。主な内容は次のとおりです。

第 6 条 何^{なんびと}人も、公共の場所等にみだりに空き缶等、吸い殻等、又は

調理くず等を^{とうき}投棄し、又は^{ほうち}放置してはならない。

第 9 条 自動販売機により容器入り飲料を販^{はん}売^{ばい}する者は、回収容器を設置し、飲料の容器が周囲に散^{さん}乱^{らん}しないよう適正に管理しなければならない。

第 10 条 市民等は、公共の場所等において夜間における花火（以下「夜間花火」という。）をしてはならない。

三浦市の取り組み



「三浦バイオマスセンター」（愛称：「MKE BIMAステーション三浦」）

家畜排せつ物や生ゴミ、木くずなどの動植物から生まれた再生可能な有機性資源のことをバイオマスといいます。

※農林水産省HPより

し尿・浄化槽汚泥だけでなく、三浦市の特産物である大根、スイカなどの農産物残渣（未利用バイオマス）や処理後の小魚など（廃棄物系バイオマス）の水産残渣と一緒に処理することが特長です。

また、処理の過程で生じるメタンガスを、施設を動かすためのエネルギーとして再利用し、堆肥化設備を備えて、堆肥を生産し、農家に利用してもらう資源循環型の施設となっています

※三井造船株式会社より

「スカベンジ（scavenge）」とは、「～を清掃する」「～をゴミのなかから探す」というような意味の言葉です。

《 三浦市の取組み 》

平成18年度から実施している継続事業として、主に次に掲げる事柄を重視しながら、取組を進めています。

- 1 民間企業等と協働し、社会貢献活動としてのスカベンジイベントの開催
- 2 流行発信や新たなスカベンジの提案者である大学生によるスカベンジの実施
- 3 従来から長く地域で実施していただいている、スカベンジ活動を本市の「クリーンアップ・プロジェクト」とし、広く一般の方の参加を呼びかけ実施するための活動
- 4 身近な環境問題について考える大切な環境学習の実践の場として、小学校や中学校にもスカベンジ活動に取組んでもらうように呼びかけを行なう。

「クリーンアップ・プロジェクト」は平成18年度から実施の事業ですが、それ以前から地域清掃として、地域の人たちがスカベンジ活動に取組んでいます。

スカベンジ活動の様子（三浦市HPより）



- 4-12 -

1991(平成3)年には、ゴミ問題を基本的に改善しようということから、新しいゴミ収集システムの開始とあわせて、毘沙門地域にゴミ処理施設として、環境センター、最終埋立地として、西岩堂埋立地が完成し、操業を始めました。これは、分別収集を徹底するなかで、生ゴミを中心とした有機物をコンポスト(堆肥)として再生産し、残りのゴミを減容・固化(小さなかたまりに固める)し、能率的に埋め立てるものです。しかし、1999年(平成11年)には最終埋立地の容量は限界に達し、今後最終処分場をどのように確保していくのか大きな問題となっています。

また、こうした中、三浦市は地域再生計画とバイオマスタウン計画を策定し、バイオマス施設の整備を計画。2006年(平成18年)に三浦バイオマスセンターの設立準備が開始されました。この三浦バイオマスセンターは、老朽化に伴い限界を迎えていたし尿・浄化槽・下水道の浄化施設を更新し、加えて農水産物の残渣も処理する機能を持ち、さらに処理の過程でたい肥と電気を生み出す資源循環型施設で、2010年(平成22年)に本格稼働を開始しました。

(5) 三浦市の未来像

三浦市では農業・漁業・観光という3つの分野を基礎としながら、商業、サービスも含めて、それぞれの分野が確立してきた生産、流通・加工、商品・サービスで業、販売などの一連のビジネスのしくみを共有して、各分野の枠組みを超えて、人々の多様なニーズに対応できる「6次経済」(=1次×2次×3次)の構築をめざして・まちづくりを進めようとしています。

第4次三浦市総合計画(愛称「三浦みらい創生プラン」)では、「人・まち・自然の鼓動を感じる都市 みうら」を目標にかかげ、2025年の三浦市

ごみと資源の分け方・出し方

この冊子は、「ごみと資源の分け方出し方早見表」の追補版として、各種分別のごみの分け方・出し方について、より詳しくご案内するものです。

(平成25年1月7日(月)からの各地区ごとの曜日別収集品目)

	三崎地区	南下浦地区	初声地区
月	プラスチック製容器包装 紙製容器包装・紙バック ミックスペーパー	一般ごみ	一般ごみ
火	一般ごみ	新聞・雑誌・段ボール びん・缶・金物類	新聞・雑誌・段ボール びん・缶・金物類
水	ペットボトル 埋立ごみ (毎月の第2・第4) 枝木・草葉類 (毎月の第1・第3・第5)	プラスチック製容器包装 紙製容器包装・紙バック ミックスペーパー	紙製容器包装・紙バック ミックスペーパー
木	新聞・雑誌・段ボール びん・缶・金物類	一般ごみ ペットボトル	一般ごみ ペットボトル
金	一般ごみ	埋立ごみ (毎月の第2・第4) 枝木・草葉類 (毎月の第1・第3・第5)	プラスチック製容器包装 埋立ごみ (毎月の第2・第4) 枝木・草葉類 (毎月の第1・第3・第5)

※ ごみは上の表の分別を守って、当日の朝8時30分までに決められた場所に出してください。

※ 粗大ごみは予約申込制(有料)です。

予約申し込み先は 888-7477(峠興業)まで

ごみ収集に関する問い合わせ先:環境部廃棄物対策課 882-1111 内線291・299

三 浦 市

の姿を創造し、次のようなまちづくりをめざしています。

1 **一体感のある都市**をめざして～心を合わせる

まちづくりの目標を共有し、目標に向かって共に支え合い、その成果を享受する都市。

2 **もてなしの心をもつ都市**をめざして～交流を育む

市外からの人、もの、情報を歓迎し、交流を深めることで市民自らも豊かさを享受する都市。

3 **住み心地の良い都市**をめざして～暮らしを支える

「このままずっと」「いつかはきっと」と三浦市で暮らしたいと思えるような都市。

市は一体感のあるまちづくりや6次経済を進め、都市構造を確立するために、土地利用、都市計画、海・漁港の利用のあり方などについて抜本的な見直しに取り組み、必要な都市機能・基盤の整備に着手しようとしています。

目標実現のためには、市役所と市民が連携し、協力することが必要です。

(6) 自然や文化遺産の保護

市の木に指定されているクロマツは、現在限られたところにしか自生しておりません。数十年前までは”白砂青松”の海岸が三浦市のいたるところで見られたそうです。海辺の海浜植物も、多くの人の訪れと海辺の汚れのなかで、その数を減らしています、また、数万年から数千年前に三浦に住んでいた人たちの遺跡が、住宅開発などで失われようとしています。小松ヶ池は汚れ、夏の夜に蛍が乱舞する話は昔話になろうとしています。

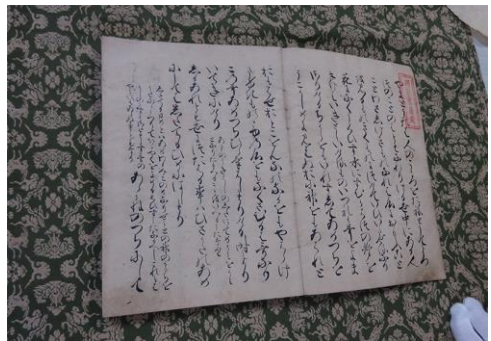
開発と自然や文化財の保護、両者をどのように組み合わせていくのかは難しい問題です。三浦市内でも、首都圏内で貴重な生態系を残す小網代の森、三浦半島では数少なくなった江奈湾の干潟、そして、赤坂遺跡をはじめとする歴史的遺産などを守ろうとする運動がおきています。

目先のことだけにとらわれるのではなく、古い歴史をあたため、次の世代、その次の世代を見通してみんなで考え、共通理解を深め合う必要があります。そして、そのようななかで、三浦の三浦らしさがまた生まれてくるのではないのでしょうか。



例大祭（海南神社）

（編集委員撮影）



三浦道寸の書（古今和歌集）

（編集委員撮影）